

# 大西洋奴隷貿易とコンゴ王国

おやさと研究所准教授  
森 洋明 Yomei Mori

かつて、コンゴの首都ブラザビルの駅前には、両手を高らかに上げている像が置かれてあった。(現在は別の像が置かれている。) その両手からは鎖が垂れ下がっていて、「解放の像」と呼ばれていた。正式名称かどうかは定かではないが、鎖が解かれた両手を見る限り、いかにも奴隷の身分から解放されたことを象徴している



ブラザビル駅前にあった解放の像

ようだった。奴隷解放を表現する同じようなものは、セネガルやザンジバルなど、アフリカ大陸で奴隷の集積地となったところにも存在している。

「奴隷」と言えば、アフリカからアメリカに大量に送られた黒人奴隷が想起される。いわゆるヨーロッパとアフリカ、そして発見されたアメリカ大陸の間で形成された「三角貿易」と言われるもので、中学や高校の世界史でも登場する歴史的事実だ。しかし、奴隷は人類の歴史のなかであちらこちらに見られる制度だった。この奴隷ということば自体が、フランス語で「esclave」（英語では「slave」）であり、それらは中世ラテン語の「sclavus」（スラブ人）を語源とし、中世初期にバルカン半島の多くのスラブ人がゲルマン人や東ローマ帝国の人によって奴隷にされた歴史に繋がっている。『聖書』にも奴隷の文字が多く見受けられる。アフリカ大陸内においても、新大陸に大量の奴隷が持ち出される以前から、王国間の争いのなかで、勝った方が負けた方を奴隷とする習慣があった。それは、ポルトガル王国と対等な同盟関係を結んでいたコンゴ王国も例外ではなかった。したがって、前回は述べたように、ヨーロッパがサハラ以南のアフリカと出会ったときには、そこには奴隷という「商品」がすでにあっただろう。

しかし、それまでの奴隷と、大西洋を舞台に展開された三角貿易によって大量に運搬された黒人奴隷とは大きな違いがある。それまでの奴隷は一定の役を終えると奴隷でなくなったり、主人から解放されたりすることがあった。あるいは、奴隷といっても家畜の世話や家事などの労働であり、「屋内奴隷」と呼ばれていたものだった。ところが、アメリカ大陸に送られた奴隷たちは、奴隷としてずっと働き続ける運命にあった。肌の色や人種を差別したこともあり、奴隷の身分が解かれるのはごく希だった。多くは奴隷として一生を終え、さらに奴隷の子孫までもが奴隷として生まれ、働くことになっていたのである。18世紀後半から、アフリカからの奴隷の輸出量が少なくなっていくが、その背景には、新大陸において奴隷の需要が減ったことが挙げられるが、奴隷の子孫が増えたことも一因している。

自らも洗礼を受け、王国内のキリスト教化を積極的に押し進めていったコンゴ国王だが、王国内の奴隷狩りが盛んになるにつれて、ポルトガルとの関係も少しずつ揺らいでいくように

なる。その発端となったのが、現在のガボン共和国の海岸沖に位置するサン・トメ島（現在のサントメプリンシペ）の発見だった。もともと無人島だったが1470年にポルトガル人が発見して以来、流刑地として使われるようになった。本国からの流刑地とはいえ、そこでは自由の身になれたことから、冒険家やさまざまな理由で本国にはおれない人たちが集まりだすようになる。さらに、インド洋へ抜ける海上ルートが開かれると、この島は寄港として重要視され、経済が活気づき植民者は増加の途を辿った。砂糖やコーヒーの栽培が行われると労働力の需要が高まり、大陸から奴隷が送りこまれるようになる。そしてその主な供給源がコンゴ王国だった。王国内の奴隷狩りによって、キリスト教を介してのアフリカ人王国のヨーロッパ化は頓挫し、ポルトガル人がやって来る以前より混乱する社会となっていく。コンゴ王は幾度もポルトガル国王宛の書簡を送ったが、ヨーロッパ諸国の関心は新大陸の開発に転じていたので、コンゴ王国に好意的な返答はなかった。コンゴ国王は奴隷売買の禁止令を出す、大した成果は得られず、逆に国王の偉功が失われているのが露呈することになった。

コンゴ共和国の第2の都市であるポワント・ノワールにも、かつて奴隷集積地があった。この街の呼称はかつてのポルトガル名「Ponta Negra」に由来しており、黒い突出した岩が目印となったところから名づけられている。15世紀から本格化する大西洋奴隷貿易でも、コンゴ王国周辺地域はその中心的役割を担っていた。ポワント・ノワールから北方へ25kmの地点にはロアンゴという港が整備され、そこから2百万もの人たちが、新大陸に向けて集積され、船荷として輸出された。現在の国名で言えばチャドやガボン、コンゴ共和国やコンゴ民主共和国からの奴隷が集められた。コンゴ王国からは全体としては、約5百万人の黒人奴隷が運びだされたという。



ロアンゴ王国の王宮跡を利用した博物館

ロアンゴ王国が奴隷の交易で栄えたように、大西洋奴隷貿易には沿岸地域の王国が関与している。「奴隷狩り」と言えば、白人が黒人を見つけては捕らえるようなイメージが想像されやすいが、多くの奴隷はヨーロッパ人と貿易をしていた沿岸部の人々が調達した。彼らは奴隷と引き換えにヨーロッパの火器を取得し、圧倒的武力で奴隷狩りを行ったのである。

そしてこれらすべての出来事は三角貿易と同様に、世界史でも学ぶコロンブスによる新大陸発見と深く関わっている。スペインによるアステカ帝国の滅亡やインカ帝国の征服、あるいは「委託」という名の下に土地の支配権を得る制度などによって原住民には過酷な労働が強いられていく。さらにヨーロッパからもたらされた疫病も加わって、インディオの人口が激減した。その労働力を補う形でアフリカ大陸から黒人奴隷が輸出されたのだった。